

この頃は、左衛門先生の颯爽とした姿が屢々流觴居に見えた。寒燈会を浜町で開く度には必ず加はって下さった。

七

吟行の楽しさ。そんな事も私達の話題によく上った。曲水では一度秋に大宮の氷川公園に出掛けた事があつた。当時、一番目立って景気よかつたのはホトトギスの吟行だつた。しかしホトトギスの吟行には、途中で逢つた豆腐屋の荷を全部買占めてしまつて、それを一同が担いで豆腐を買ふ家々にたゞ呉れて歩いたり、停車場の酒の売子を身ぐるみ買つて二等車へ乗せて爛番をさせながら途中まで伴れて行つたり、私達にとつては憚くべき附録がついた。私達は私達の好む吟行をやらうといふので花には少し後れた或る日曜日、苔雨、よしを、樹人、私の四人で郊外の春を惜しみに出掛けた。しかしまだ残つた花を酒を担いで追掛ける都人で、雨催ひの朝の電車は一ぱいだった。玉川電車に乗り込む頃から、果して細かい雨が降りだした。私達は途中で早い粽と番傘を買つていゝ、加減な処で電車をすてた。そして古い街道をあてもなく歩いた。辛夷の花が処々に咲いてゐた。食べながら歩く粽の皮が何処までも雨の路につぶいた。とうとう途中で見かけた路標べを辿つて奥澤の九品仏まで辿りついた。

九 品 仏

人の世をへだつ障子の落花かな よしを
この句が代表したやうに、私達の吟行は極めて静かだった。朗かな笑ひしかた、なかつた。また雨の中を三軒茶屋まで戻つてその古い茶屋で遅い昼食を食べた。二階から見ると大株の

木瓜が燃えたつやうに咲いてゐた。美しい姉妹の娘がお給仕に出て少し酒を呑んで、よしを君が珍らしく高島屋の声色を一つやると、みんなぐうぐう眠つてしまつた。夜になって渋谷へ出ると、寄席を見かけたので入つて見た。直にヒ首が閃くやうな怪しげな芝居だつた。春の夜の蒲団の下の死骸かな……そんな事を口々に言つて苦笑した。

八

同時に、私は国許の家へは法科にといふ事にして置いて、早稲田の、実は文科に入つてゐた。そんな事から、昼間があげられない苔雨君達よりも、私が一番足繁く流觴居へは通ふやうになつた。学校の帰りから本包みを抱へて、東京のはんぺん見たいな学帽を冠り、制服を着て行く私の姿は、当時流觴居の玄關に入る者としては、余程珍なものだつたと思ふ。昼少し過ぎた頃から出掛けて行つても、帰りはやはり終電車かつくだった。そんな日には夕飯はいつも先生より早く一人で茶の間へ入つて御馳走になつた。それがまた丁寧なものなので初めは大分弱つたけれども、慣れると私もいゝ氣になつてすまして煮えたつ鳥鍋をつゝいたりした。

九

両親の前を偽りまでして入つた文科であつたが、この教室といふものが更にはづみのないものだった。講義の面白くないのは、初めのうちだからといふ我慢もあつたが、一緒に入つた同級生の空気がすぐに嫌なものに思へ出した。これが文科生なのかと考へるとうんざりした。が間もなく同じ思ひらしい有志が